
王様シリーズ2

なく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様シリーズ2

【Nコード】

N6935K

【作者名】

なく

【あらすじ】

王様シリーズの続き 仲間集め編

王様と仲間達 水色編？

弟さん、大学入ったんだってねえ、偉いわねえ。

―はい、これから頑張るって意気込んでますよ。

弟、今度は四期生になるんだって？すげえよなあ。

―ああ、あいつはすごいよ。

弟さん、三期生になったんですってねえ。優秀な弟さん持って、幸せねえ。

―ええ。とても嬉しいです。

お前の弟、今度二期生受けるんだって？お前も鼻が高いだろ。その内抜かされちまうかもしれないな！。

―ああ、自慢の弟だよ。自慢の・・・

フランスは彷徨っていた。門から国の中に入ってみたはいいものの、その後どうすればいいのかさっぱり分からないからである。

チロリとやや後方を歩く白夜を見ても、何か声を掛けられることはない。

白夜は、国に入った時に「お前の行きたいところに行け」と言ったり黙っていて、それ以上の情報を与えてくれる気配はない。

「とりあえず、やっぱこの国のことを知らなきゃなー・・・」

ぽつんと独り言を言った。

それを聞いていた白夜が少しだけ微笑んだのだが、斜め前に居るフランスには見えなかった。

「そういうの教えてくれるとこってー・・・わっ！」

フランスがぶつぶつ言いながら顔を上げた瞬間、横から飛び出してきた人物にぶつかった。

「す、すみません！」

その人物は、フランスにぺこっと軽く頭を下げると、そのまま走り去って行った。

「——？なんだあ？」

フランスは首を傾げて、その人物の走り去った方を見た。

一瞬、見えた表情が、ひどく焦っているような、怯えているような、そんな表情だったからだ。

白夜は、そのやり取りを見て眉を顰めた。そして、辺りの上空を見回すように、視線を廻らせた。その視線が、とある一点で止まる。

「・・・・・・・・」

そこを暫らくじっと凝視してから、歩き始めたフランスの後を追う

かけた。

「・・・ふー、危ない危ない」

白夜が見つめていた一点―何もない中空の景色が、歪んだ。

「あーやあ、バレたかな」

現れたのは、オーギュだった。

「あれはもう、大体解ってるな」

オーギュが横に話しかけるように言うと、虚空からもう一人、男が出現した。

「・・・流石は救世主殿と言ったところか」

低く、何の感情も籠もらない声で、その男は言った。

腰まである茶髪に、吸い込まれそうな闇色の瞳。腕を無造作に組み、同じく感情の籠もらない瞳で、遙か下のほうを歩くフ란ツ達を見ていた。

「・・・だが、もう遅い」

一瞬、その瞳がますます昏くなったかと思うと、その姿は消えていった。

空中に一人残されたオーギュは、楽しそうに下を見ている。

「今度は、どんな反応するかなあ？せいぜい、楽しませてくれよー」

クスリと、その口元が笑った瞬間、オーギュの姿も空中に掻き消えた。

フ란ツは、またもや彷徨っていた。ふらふらと歩いていると、何だかやたらと大きな建物にたどり着いた。

「・・・ここ、役所かなんかかな・・・」

「まあ、そんな所だな」

久々に白夜の声を聞いたなと思ってフランツが振り返ろうとすると、白夜はスタスタとその中に入って行く。

「あ、おい！ここであつてるのか？」

フランツが声を掛けると、白夜は涼しい顔で言った。

「どうせここに入る気だつたんだろう？さっさと行くぞ」

「う・・・」

そのまま突っ立っていては始まらないので、フランツは白夜の後を追って建物の中に入って行った。

「すげー・・・」

中に入ってフランツは感嘆した。

外から見ても大きな建物だったが、中に入ってみても広い建物だった。

しかし、未だにこの建物がなんなのか解らない。解ることと言えば、部屋がやたらとたくさんあることだ。部屋と言っても、普通に生活するための部屋ではなく、そこかしこに机が置いてある、あまり見たことのない部屋だった。

「ここ、何なんだ？」

フランツは先を行く白夜に訊ねた。

「現地のことは現地の奴に訊けと言っただろう」

そうしてまた教えてもらえない。

フランツがやや不貞腐れた顔をしていると、渡り廊下のような所に出た。渡り廊下と言っても、そこは中庭を横切る為に作られた通路だった。

何ともなしに中庭を見回すと、何か石像のようなものが建っていた。それが気になって中庭に下りてみる。

その石像は、老人の上半身であった。上半身と言っても、腕はなく、顔と胸の辺りだけである。顎鬚と口髭の繋がった、顔の下半分は髭

で覆われているようだ。

「・・・誰だろう、これ・・・偉い人かな」

「私です」

「うわ!？」

呟いた言葉に返事があつてフ란ツは驚いて声を上げた。

振り向くと、ニコニコとしている老人が立っていた。この石像と全く同じ人物である。

「あ、あの・・・？」

「私は、ここの学長をしております、道晋というものです。貴方は、見学にいらしたのですか？」

相変わらずニコニコとしながら老人は訊いてきた。

「あの、俺は・・・その、この国に来たの初めてで、その、この国のことを教えてもらおうと思つて・・・」

しどろもどろに言つと、老人はにこやかに目を細めた。

「それでは、貴方は旅の方でしたか。お一人ですか？」

「いえ、もう一人・・・」

「フ란ツ」

白夜の声がして振り向くと、後ろに白夜が立っていた。

「何をしている?・・・そちらは・・・」

白夜が老人の方に視線を寄せると、ん?という顔で軽く目を瞠った。対する老人は、目を見開いている。

「お師匠様・・・」

「・・・お前、道晋か。長生きだな」

「お師匠様ほどではございませんよ」

そう言つて、老人は顔を綻ばせた。またもやフ란ツは置いてけぼりを食らわされていたが、何だかもう慣れっこだった。

王様と仲間達 水色編？

十になった頃、ふうわりと白い人が現れた。

「お前に学問を授けてやろう」

そう言ってその不思議な人は、己に学問を伝えてくれた。

【王様と仲間達 t i t l e : 水色編？】

まあ立ち話もなんだから、と学長室に案内された。

中は広く作っており、窓際に大きな机があった。

部屋の中央にはソファとテーブルがあり、フランチと白夜はそこに座り、道晋と名乗った老人は向かいのソファに座った。

「いやあ、まさかこの歳になって貴方様と再会できるとは思っておりませんでした。本当に、お懐かしい・・・」

うんうん、としみじみと言っている老人は、先ほど白夜を「お師匠様」と呼んだ。

「あの、お師匠様というのは・・・？」

おずおずとフランクが声を掛けると、学長が気がついたようにフランクに微笑んだ。

「ああ、すみませんなあ。つい、懐かしくて・・・この方は、私のお師匠様なのですよ。私が十になった頃に、突然私の前に現れまして・・・私に学問を授けてくださったのです」

「はあ・・・」

説明されてもよく解らない。

「・・・白夜って、何歳？」

どう見ても目の前の老人は60・70代。対して白夜は俺と同じ年ぐらいに見える。

「前にも言っただろう。お前よりは年上だと」

「年上って、どのくらい年上なんだよ」

アバウト過ぎて腑に落ちない。だって、どう考えても60以上ってことになるし。

（あれ、でも、白夜って、前の王様の時も居たんだけ・・・じゃあ軽く500年は生きてるのか？）

救世主っていうんだから、ヒトじゃないのかも、と思いながら頭を抱えているフランクをそのままに、白夜は道晋に向き直った。

「道晋、この国のことをこいつに教える必要がある。誰か案内をつけてくれないか」

「貴方様の頼みとあつては断れません。はて、誰を付けたものか・・・」

コンコン

道晋が少し考える仕草を見せた時に、ドアをノックする音がした。

「どうぞお入りなさい」

道晋が声を掛けると、静かにドアが開かれた。

「失礼致します」

入ってきたのは、まだ十歳ぐらいの少年だった。薄い水色の髪に、深い青い瞳が印象的な、思わず弟にしたくなるような可愛らしさで、手に分厚い本を持っていた。

「ああ、慎倫。どうしたのかな？」

慎倫、と呼ばれた少年はフ란ツ達に頭を下げてから話し始めた。

「学長様に教えていただきたくところがございます……ですが、お客様がいらしたのなら、また後で……」

ちら、と見知らぬ二人の様子を伺うように見てきた慎倫に、白夜は声をかけた。

「俺たちのことは気にしなくていい」

「お客様もこう仰っていることだし、何処が訊きたいんだい？」

学長に促されて慎倫が持っていた本を広げると、微かに古紙の匂いがした。どうやら、かなり古い本らしい。

「ここ……『華桃院』の二章四行目なのですが、初めて見る字があります……」

慎倫は、たくさんの文字が並んでいる文章の中の一文字を指差していた。

“眞”

「ふむ……確か、ここは“眞”である筈だな……」

道晋は顎鬚を撫でつつうん、と唸った。そして、チラリと白夜を見やる。その視線を受けて、白夜は溜め息をついた。

「貸してみる」

白夜がそう言って手を伸ばすと、慎倫が戸惑いながらもその本を開いたまま渡す。

「……これは、旧字だ。古い本だからな。そのままになってるんだろう」

白夜は何でもないことのように言った。

「旧字、ですか？」

「そうだ。もともと、華桃院は灯照明君が木に彫りつけた物。彫り付けた当時は“眞”にしたが、それを学師に頼まれて書にしたためた時に“真”に直したんだ。その時に書かれた書を参考にしている

ものでは“真”になっているが、木に彫られた方を見本としているものでは“眞”となっている。これは後者なのだろう。・・・作者が山義慶だからな、古い筈だ」

そこまで一気に喋った白夜は、再び本を慎倫に差し出して、ぎよつとした。自分を見つめる慎倫の瞳がキラキラと輝いていたからだ。
「すごい！何処でそんな細かいことまで知ったんですか？あ、あの、失礼ですがお名前をお伺いしてもよろしいでしょうか！？」

途端に興奮している慎倫に圧倒されるように、白夜はちよつとたじろいだ。フランツはそれを呆氣に取られて見ている。道晋は微笑んでいた。

「この方はな、私の学問の師なのだよ。慎倫、訊きたいことがあったらどんどん訊きなさい」

「はい！学長様！」

「おい、道晋、お前何を・・・」

白夜が嗜めようとすると、慎倫のキラキラした瞳とかち合った。

「僕は慎倫と申します。学長様のお師匠様にお会いできて光栄です！あの、それで、今仰っていたことは、何で知ったのでしょうか、是非教えていただけませんか？」

フランツはキラキラな瞳の少年を見て、この子は相当学問が好きなんだろうなと思った。その間も白夜は質問攻めにあっている。

「何でと言われても・・・全部見てきたことだからな・・・」

白夜は答えようがなかった。慎倫にとっては本の中の出来事だとしても、白夜にとっては過去の現実だからだ。何処で仕入れた知識かと言われたら、その時その場で見えていたからだとか言い様が無い。
『え？あれ書にしたためんの？面倒くさいなあ、白夜やっというよ』
そう言っただけで眠りこけてしまった灯照明君もきつちりとこの目で見ている。・・・結局起こして書かせたが。

『うー・・・ここ何て書いたんだっけ・・・眞って書くの面倒だから真でいいやー・・・』

半分眠りながら書にしたためていた灯照明君のことを思い出して、

白夜は顔が引き攣りそうになった。どうも灯照明君という人は、適当過ぎるくらいがある。この華桃院だって、自分で書いたくせにちゃんと覚えていないのだ。

「そうだ、慎倫。貴方をこの方達の案内にしましょう。それなら良いでしょう。慎倫、この方達は旅をしておいででな。この国を案内して差し上げなさい」

伺うように白夜を見やった道晋は、やや面白そうな笑みを浮べていた。

（こいつ、謀ったな・・・！）

白夜は、道晋も自分と同じで説明が苦手なことを思い出した。学長をやっているくせに、それは60年経った今でも変わっていないらしい。

「はい！喜んで案内させていただきます！」

もうキラキラモードに入った慎倫は誰にも止められない。

三人は廊下を歩いていった。これから街の見物に乗り込むのだ。

「僕、明日試験を受けるんです。ですから、お師匠様にたくさん訊きたいことがあるんです」

もう既に白夜をお師匠様と呼んでいる慎倫は、白夜が露骨に面倒くさそうな顔をしたことに気付いていない。いや、見えていなかった。もう何も。

「試験？」

フランツが素朴な疑問を口にした。

「はい。僕もこの大学に通わせて頂いておりますが、大学には段階があるのです。まず、入学したら六期生になります。そして、その後は試験を受けて、五期生、四期生、三期生、二期生、最後に一期生となるのです」

「ふーん・・・」

フランツ、ぶっちゃけよく解っていない。呑み込みは悪いようだ。

「僕は今二期生でして、明日、二期生になる試験を受けるんです。受かったら、兄様と同じ、二期生になれるんです」

「へー、兄ちゃんいんのか」

「はい。圭凌といいます。とても優しくて、自慢の兄です」

「へー・・・」

慎倫はとても誇らしげに語っていた。周りの空気まで澄み渡るようだった。

そんな二人を、白夜は少し後ろの方を歩きながら穏やかに笑っていた。

「ところでお師匠様」

慎倫が首をめぐらせて白夜を見た瞬間、白夜は顔を横に反らした。

「訊きたいことがあるのですけど」

ニコッと笑った慎倫、キラキラモードオン。

もう誰にも止められない。

その後三時間ほど質問攻めされた白夜は、ちょっと疲れていた。結局この国の説明が全然されていない、と白夜に指摘された慎倫は、だったら自分の部屋に来てくれと言った。

「僕の部屋にはこの国の地図が貼ってあります。それを見ながら説明いたします」

というやり取りが行われ、慎倫の部屋にやって来た。

「広い部屋ではありませんが、どうぞ、お寛ぎ下さい」

今、お茶を淹れて来ますから、と慎倫は別の部屋に入って行った。

「慎倫って、スゲーな」

「・・・何がだ」

ややお疲れ気味の白夜が言った。

「だってさ、自分の国のことかだけじゃなくて、学問まで修めるんだろ？俺なんか、自分が何処に居たのかも、世界がどうなってるのかも、全然知らなかったからさー」

ははは、ちょっと恥ずかしーなー、と言ってフランチは笑った。
白夜は、そんなフランチを見てちよつと微笑んだ。
その時。

「うわーーーーーっ！！！！！！」

慎倫の絶叫が聞こえた。

「どうした！！？」

フランチと白夜が声のした部屋に入ると、慎倫が青褪めて立っていた。

「じゅ、・・・受験、票、・・・が・・・」

慎倫は震えていた。

「受験票？」

フランチは首を傾げた。

「受験票が、無い・・・」

王様と仲間達 水色編？

「兄様の夢は何ですか？」

「夢？ そうだなあ…」

（この国一番の学師になることかなあ…）

「そっいつお前は何なんだ？」

「僕ですか？ 僕の夢は、旅をすることです。世界中を回り、自分の知らない世界に出会うことです——」

その時、感じた。

ああ、自分は

器で弟に負けているんだ。

【王様と仲間達 t i t l e : 水色編？】

「受験票が、ない？」

フランクが聞き返すと、慎倫は青い顔で頷いた。

（受験票がないのってそんなに困ることなのか？）

「・・・受験票がないと、試験が受けられないんだ」

白夜が溜め息を吐きながら言った。

「え！？何、何で俺の考えてることわかんのか？！」

「・・・顔に書いてある。それより、いつから無いんだ？」

そんなに解りやすいだろうかと唸っているフランクを差し置いて、白夜は慎倫に訊いた。

「部屋を出る時に、この机の上に置いて行っただんです・・・失くすと困ると思って、学長様の部屋に行く前に・・・」

震える指先が指し示した机には、何も乗っていないかった。

「それは何時頃だ？」

「昼頃です・・・」

動揺のためか、慎倫の声も心なし小さい。

「どうしよう・・・！あれが無いと、あれが無いと・・・！」

慎倫は混乱していた。

「まあ、落ち着けよ。万が一ってこともあるから、探してみようぜ。例えば、服の中とかさ」

ポケットに入れたとか、とフランクが声を掛けると、慎倫は少しだけ落ち着いたようだった。それまで着ていた上着を脱いで、内ポケットを探る。

カシャン

「？慎倫、何か落としたぞ」

慎倫が上着を脱いだ時に落ちてきたものを拾い上げると、それはシ

ンプルな形のペンダントだった。

「これは？」

「兄様から貰った物です。この国では、自分に弟か妹が出来たら、兄、または姉になる者がこのペンダントを作って贈るんです。生まれてくる子どもに、祭神様のご加護がありますようにって」

「へえー・・・」

フ란ツはそれを暫らく眺めてから、慎倫に返した。慎倫はそれを受け取って、大事そうに握り締めた。

「大切な物なんだな」

「・・・はい。兄様から、初めて貰った物でしたから・・・」

ぎゅう、と音がしそうな程握り締めてから、慎倫はそれを首から提げた。

「衣服の中には無いようだな・・・今日は、何処かに出かけたりしていないのか？」

白夜は思いつく可能性を挙げた。

「朝、図書館に行きました。華桃院の書を見つけたのは古書の館でしたから、そこに・・・」

「行ってみようぜ」

フ란ツが言うと、慎倫は頷いた。

「ところで、受験票ってどんなやつなんだ？形とか、大きさとか」
図書館に向かう途中、フ란ツが問い掛けると、真倫は頷いて答えた。

「ええと、このぐらいの長方形で、木簡です」

このぐらい、と言いながら慎倫は指で人差し指と親指で長方形を作った。

「そこに、名前と受験番号と印が押してあるんですけど・・・その印は、特別な印で、偽造防止の為に滅多なことでは押せないように

なっているんです。だから、再発行は基本的にして貰えないんです」
「滅多なことでは押せない？」

「はい。大学の裏手に、小さな山があります。その山の山腹に仙人様が住んでいらして、その方が保管していらっしゃるんです」

だから、押してもらうには会いに行かなければならない、と言って慎倫は俯いた。

「・・・試験受けるのだってお金が掛かるんです・・・ある程度免除はして貰っていますけど、兄様と二人で稼いで、折角・・・」
唇を噛んで俯いている慎倫の頭を、フランツは撫でた。何だか、そうしてやりたくなつたのだ。

（自分に弟が居たらこんな感じなのかなあ・・・）

そんなことを考えていると図書館に着いた。慎倫の案内で古書館に向かう。

慎倫が書を読んでいたという机から、本棚の隅から隅、カウンターの下まで探してみたが、それらしき物は見つからなかった。

「・・・慎倫・・・」

フランツは、何と言葉を掛けていいのか解らなかった。白夜はずっと黙っているし、どうしたらいいのか解らない。

とりあえずもう一度部屋を探してみよう、と促して、図書館から出た。

その時。

「よお」

「！！」

知った声が聞こえて、首をめぐらすと、左側の方に二人の男が立っていた。

一人は、声を発した男。紅い髪、薄い水色の瞳、全体的に黒っぽく、露出の多い服を着ている。両腕は剥き出しで、黒いリストバンドを嵌めている。

オーギュだった。

「・・・オーギュ・・・」

「兄様!!」

フ란ツが呟いたのと、慎倫が声を上げたのはほぼ同時だった。もう一人の男の方に駆け寄ろうとした慎倫を、白夜が制した。

「お師匠様……」

「近寄るな。あの男……闇に囚われている」

驚く慎倫の横で足を一步踏み出し、白夜は懷から扇子を取り出した。扇子と言っても、普通の物よりも二周り大きい。

「お前の仕業かオーギュ」

「違うね。今回のこと、俺は加担してないぜ。てゆーかさ、俺たちは力を貸すだけだぜ？毎回言ってるけど、元々の闇はこいつらにあるんだから、俺たちが全部悪いみたいな言い方は止めて欲しいなあ？」

オーギュは口の端を吊り上げて、もう一人の男の肩に手を置いた。

「なあ？お前が思ってたことだもんなあ？お前が自分で選んだことだもんな」

「兄様!!」

またもや前に出ようとした慎倫を、白夜は扇で制した。

「……その者に何をした」

「こいつ『に』何をした？」

低く問うた声に、オーギュは晒って応えた。

「違うだろ、白夜。この男『が』何をした？だろ」

言いながらオーギュは、肩に置いていた手とは逆の手で、隣の男の上着のポケットに手を入れた。

「……っ!!」

引き抜かれた物を見て、息を呑んだのは慎倫だった。

「僕、の……受験票……？どうして、兄様が……」

瞬間青褪めた慎倫の横で、フ란ツが怪訝な顔をした。

「……何で、兄ちゃんが持ってた？……」

至極最もな問に、答えたのはオーギュだった。

「そんなの決まってるだろ。置いてあった受験票を勝手に持ち去っ

た。それが見つからなければ、そこに居る弟君は試験を受けられない。弟君が受からなければ、自分の地位が脅かされない……。」「そんな！」

フランツは声を上げた。慎倫は絶句していた。

「いつもいつも弟に抜かされて可哀想になあ？自分だって出来は良い方なのに、弟が天才だから周りから認めて貰えない。何かにつけて弟、弟、って比較されて―妬みたくもなるよなあ？」

「黙れ！！」

辺りに怒声が響いた。怒鳴ったのは白夜だ。白夜は右手に持った扇を開いた。

「ははっ！戦んのか？いいぜ、相手してやるよ。だけど久しぶりだから、手加減できないかもなあ」

言い終わった瞬間、オーギュは跳躍した。跳躍して空中に浮いたまま降りてこない。白夜もそれを追って跳躍した。こちらも宙に浮いたままである。

いつの間にかオーギュの手には剣が握られていた。柄の部分が黒い、禍々しい剣だった。オーギュが振り下ろした剣を、白夜は扇を閉じて受け止める。この扇、閉じると剣と同じぐらいの長さになる代物なので、互角に戦えるようだ。

「ははっ！楽しいなあ、お前が俺を大嫌いつていうのがすげー伝わってくる」

「死んで欲しいと思ってるんだがな」

両者、切り結びながら喋っている。

「はははは！嬉しいな。だけどさあ、白夜。何か忘れてないか」

「何だと？」

「『俺』は加担してないって言ったけど……。闇の者が加担してないとは言っていないぜ？」

「！」

弾かれたように白夜は下を見た。先程より人数が一人増えている。フランツに慎倫、そしてその兄と、その横にもう一人……。――

「ラウルス！！あいつがつ・・・ぐっ！」

「捕まえた」

視線を下に向けていた隙に、オーギュが後ろに回り込んでいた。左腕で首を捉えられ、右腕で腰を囲まれて、ほとんど抱きすくめられるような形で、動きを封じられてしまった。

その間にラウルスと呼ばれた、腰まである茶髪に、闇色の瞳を持った男は、慎倫の兄、圭凌に小刀を渡していた。

圭凌は、震える腕でそれを握った。白夜の顔が青褪める。

「ラウルス！貴様っ・・・っ！」

抱き締める腕に力を入れられて白夜は呻いた。

「お前の相手は俺だろ？」

耳元で囁かれて鳥肌が立つ。本気でこの男殺したい。

「——っ！離せ！」

「ヤダね」

今度は耳を舐められた。生理的嫌悪感が体中を駆け巡って白夜は泣きたくなったが、今はそれどころじゃない。

「シヴァ！」

何とか動いた左腕で鈴を鳴らすと、白髪の青年が現れた。現れた途端、眉を顰めてその瞳に殺意を宿した。

「てめえ・・・コロス」

グツと右拳を作ったシヴァに、白夜が命を下す。

「王を守れ！」

一瞬オーギュは呆気にとられ、それから笑みを深くした。シヴァは眉を顰めたが、下にラウルスが居るのを見て、すぐにフランスのところに下りて行った。

その時、丁度小刀を持った圭凌が、錯乱状態に陥っていた。

「お前が・・・お前が居るから、俺は・・・俺はいつも・・・っ！」

圭凌は顔を上げると、慎倫に駆け寄った。邪悪な気が立ち込めた。
「うおおおおー！」

「兄、様・・・」

呆然として立っている慎倫に、刃が振り下ろされた。

「慎倫！！」

フランツが叫んだ時、辺りに光が放たれた。

「っ・・・！？」

まるで慎倫を守るかのように放たれた光は、胸元に下げているペンダントから発せられたものだった。

「あ・・・？」

慎倫は、ペンダントを手に取った。まだそれは光り輝いている。

「何でだよっ・・・何でお前ばかりっ・・・！」

キツ、と圭凌は慎倫を包む光を睨みつけ、もう一度小刀を振り下ろした。

「兄様！！」

パキ・・・

慎倫が叫ぶと同時に、その小刀は根本から割れて跳ね返った。そしてそれは、手にしていた圭凌の胸に突き刺さった。

「兄様ーーーーーーっ！！！」

ひどくゆっくりと、圭凌は地面に倒れた。

その身からは、夥しい量の血が流れ出していた。

王様と仲間達 水色編？

妬ましかったわけじゃない。何時だって大事な弟だった。

だけど、今度の試験で、慎倫は真横にくる。

きつと、抜かされてしまう。

そうしたら、今度こそ周りから省みられなくなる。

天つ才の兄、としてしか、見てもらえなくなる――・・・

抜かされるのが怖かったんじゃない。

圭凌という存在を見てもらえなくなるのが、怖かった。

【王様と仲間達 t i t l e : 水色編？】

「兄様――！！！！！！」

慎倫の絶叫が木霊した。叫ぶと同時に駆け寄って、慎倫は圭凌の傍らに膝をつく。

胸から、止め処なく血が溢れていた。慎倫の顔が歪んだ。必死で圭凌に縋りつく。

「兄様、兄様！！兄様あつ！」

「慎倫……」

ぼんやりとその瞳を向けた圭凌の顔は、白くなっていた。

「兄、様……っ」

慎倫の瞳に涙が溢れていた。圭凌は霞んだ視界にそれを捉えて、笑った。

「ひどい、ことを……したな……」

妬むつもりなどなかったのに。お前は何時だって、大事な弟。

「いいえ、……いいえ！この慎倫こそ、兄様にずっと、辛い想いをさせて……それにも気付かずにつ……ごめんなさい兄様！！」

慎倫は泣いていた。零れ落ちる涙を拭うこともせずに泣いた。

「お前、は……悪くない、さ……好きな学問を、一生懸命やっていた、ただだろう……？」

そうだ。悪いのは俺だ。

目先のことにばかり囚われて、心を闇に染めた。

「兄様……」

慎倫は、横たえられた圭凌の手を握った。

「兄様、確かに慎倫は学問が好きです。けれど、兄様が喜んで下さらないなら慎倫は学問など致しませぬ。兄様が苦しんでおいでだと知っていたなら、疾うの昔に学問などやめておりました……！」

それを聞いて、圭凌は僅かに瞠目した。

目の前で泣き崩れる弟。真っ赤に染まった自分の手。

（……俺、は……）

『兄様！今日は燦寺院の二章を覚えたのです！聞いていて下さい』

『兄様、ちよつと解らないところがあるのですが、教えていただけますか？』

いつだって学問が大好きで、いつも学問のことばかり考えていた弟。

『兄様！慎倫は今度二期生の試験を受けます。これでやっと、兄様の近くに居られます』

そうだ、慎倫は。

学問が大好きで、早く俺に追いつきたくて……

ゴボツ

「兄様！」

血を吐いた。肺が軋んで息をするのが苦しい。

きつとこの小刀のせいだろう。なんせ闇の者から与えられた者だ。
(恐ろしいことを、しようとしていた――)

慎倫は何時だつて、「圭凌^{おれ}」を見てくれていた。

前を歩く、「圭凌^{おれ}」の背を、真っ直ぐに追いかけてきてくれていた。

「……慎倫、……お前は、学問を究める……」

「兄様」

視界がだんだん霞んでいく。微かに慎倫が戸惑っているのが見えた。

「約束……した、だろう……立派な、学師になると……」

「兄様……」

——いいか慎倫。父様も母様も立派な学師であらせられた。

俺達もそれに恥じぬよう、立派な学師になろう。

はい、兄様。

慎倫はどこまでも、兄様に着いてゆきます――

「立派な・・・学師になれ・・・俺や・・・父様や母様を越えるぐらいに・・・」

手から、力が抜けていく。

「兄様・・・っ！」

「お前はいつだって、俺の自慢の弟だよ――」

とても綺麗な笑みを浮べて、圭凌は事切れた。

完全に力を失った手が、慎倫の手の中で熱を失っていく。

「兄、様・・・」

慎倫はどこまでも、兄様に着いてゆきます

どこまでも、兄様に――

「――兄様ああ――――っ！！！！」

慎倫の絶叫が響いた。

フランクは呆然とそれを眺めていた。

今、目の前で、人が一人、死んだ。

なのに、自分は。

（何も、出来なかった――）

ギリッと歯を噛み締めた。握り締めた拳に力が入る。

「あーあ、死んじまいやがった」

特に何か感じたふうでもなくオーギュが言った。

白夜は俯いて唇を噛んでいた。

「あれ、まだコレしてたんだ。妬けるねえ」

オーギュは左手で白夜のピアスに触れようとした。

瞬間。

ゴッ

白夜は、扇の柄でオーギュの額を思いつきり突いた。束縛が緩んだ隙に、下に降りる。

「つてえーっ・・・軽く脳震盪起きたな、こりゃ」

額を擦りながら言うと、オーギュも下に降りた。

不意に、慎倫の慟哭が止まった。フランツが顔を上げてみると、圭凌の体が崩れていた。

「え・・・」

圭凌の体が、それこそ砂のようになって、少しずつ風に運ばれている。

「何だよ、これ・・・」

「あの小刀のせいだ」

フランツが呟くと、横に降り立った白夜が言った。

「あの小刀は、闇の力で作られている。・・・あれで刺された人間は、その形をとどめてはいられない・・・」

痛みを堪えるような顔で、白夜は言った。

遙か昔、シュトラウスも、こんなふうに、風に乗って消えた。

「そんな・・・」

フランツは愕然とした。

「・・・兄様・・・」

慎倫は最後まで手を握っていた。瞳からは止め処なく涙が零れ落ちている。

不意に、慎倫はその涙を拭って立ち上がった。

「慎倫は、立派な学師になります！！兄様に誇れるような、立派な学師に、きっと成ってみせますー！！」

風に乗って消えていく粉に向かって叫ぶように、慎倫は言った。

「慎倫・・・」

間もなく膝をついた慎倫に、フランツは駆け寄った。

「兄様・・・」

そう呟くと、慎倫はフランツに体を預けた。

その間、白夜は先程圭凌に小刀を渡した男と向き合っていた。

「貴様の仕業か、ラウルスー」

白夜は、沸々と込み上げる怒りを抑えながら言った。

「手を貸したまでのこと。我等とて、種のないところに花は咲かせられん」

「何の、為にー」

ラウルスは、フランツに視線を遣った。

「王を、たたせぬ為だ」

「――！！」

反応したのは、フランツだった。

「王を・・・？」

「お前が王位につくと、我等は世界に手を出しにくくなる。―お前には、何の恨みも無いが、消えてもらっぞ」

ラウルスは、スッと手を伸ばした。

その手先から生じた何かは、フランツの前に立ったシヴァによって消滅させられた。

「こいつは殺らせねえ」

シヴァが、右手を前に掲げながら言った。

ラウルスとシヴァは暫らく睨み合っていた。不意に、ラウルスが視線を白夜に戻した。

「白夜」

応えるのを待つでもなく、ラウルスは言った。

「眠っているだけだ。我等はまだ何もしていない」

「！！」

その言葉の意図するところを知って、白夜は驚いた。

「何でそれを――」

教えてくれるんだ？と言う前に、ラウルスは踵を返した。代わりに、近くに降り立ったオーギュが言った。

「教えた方が、面白いからだよ、白夜。前王のことになると、お前は見境がないからな――」

くつくつと笑って、オーギュは白夜を見据えた。

「またな、白夜。それと王様？今度会う時は、また楽しませてくれよ」

言うだけ言って、暗闇に溶けていった。

「・・・白夜、今は・・・オーギュと一緒に居たのは、誰なんだ」

「アレも魔帝の息子だ。長兄だな」

「魔帝の子って、他にも居るのか？」

「・・・居るぜ。厄介なのが」

そう呟いたのはシヴァだった。

「アンタは・・・前にも会ったことあったよな」

「シヴァは俺の護衛だ。天帝から授けられた・・・」

「あの・・・」

三人で話していると、慎倫が遠慮がちに声を掛けてきた。

「貴方がたは、一体何者なんですか・・・？」

気絶しそうなほど蒼い顔だった。おそらく精神力で持たせているのだろう。

「その話は後でしょう。とりあえず慎倫、お前の部屋に帰ろう」

フランツがそう言って慎倫を立たせると、戸惑いながらも頷いた。

王様と仲間達 水色編？

父様と母様が倒れた時、自分は何も出来なかった。
ずっと泣いてばかりで、何の役にも立たなかった。

兄様だって悲しいはずなのに、ずっと僕を慰めていてくれた。

だから、僕は決めた。

もし今度、大切な人を失うことがあったら、その時は。

どんなに悲しくても、顔を上げて進もうと。

【王様と仲間達 t i t l e : 水色編？】

素性を訊ねたのはこちらだったけれど、聞かされた真実はあまりに
唐突なもので。

慎倫はただでさえ倒れそうな神経が更に磨り減った気がした。

「ーと、いうわけだ」

お師匠様―名前は白夜さんというらしい―が話し終えた時、慎倫は軽く眩暈を覚えていた。

あの後、兄様が消えてしまった後―慎倫はフランスの手を借りて大学の寮に戻ってきた。するとそこには既に道晋が立っていて、心配そうにこつちを見ていた。

「それでだ、慎倫。お前がどうやら水色の祭神の加護を受ける者のようだ。・・・どうする」

白夜はフランスに視線を向けた。フランスは、うーん、と唸って頭を掻いた。

「その、・・・俺としては一緒に来てくれたら嬉しい、けど・・・無理強いする気はないんだ・・・慎倫が、この国に居るっていうんなら、それでも・・・」

「行きなさい、慎倫」

フランスがもごもごと言っているのを遮って、道晋が言った。

「学長様・・・」

「お前は、常々世界中を廻りたいと言っていただろう。いい機会だ。行ってくるといい」

ここに居るのでは、きっと思い出して辛いだろう。道晋は微かに眉根を寄せた。

（この子は、まだ、12歳なのだから・・・）

誰かが傍で支えてやる必要がある。だが、自分にはそれが出来ない。道晋は白夜に視線を送った。白夜は無言で頷く。

「それに、この方々について行った方が、より多くのことが学べるだろう」

「道晋・・・」

白夜が、お前さり気なく面倒なことを俺に押し付けてないか？という目で道晋を見ていたが、本人はどこ吹く風といったふうに目を反らしていた。

「僕・・・行きたい、です・・・行かせて下さい!」

「慎倫・・・」

立派な学師になると約束した。約束したから、だから。

「お力になれるかどうかは解りませんが・・・僕は、貴方の為に全力を尽くします」

慎倫は、椅子から立ち上がってフ란ツの前に跪いた。

「私を学師としてお選び下さったこと、祭神様に感謝いたします」

「慎倫・・・」

正直、フ란ツは戸惑っていた。まだ自分に王という自覚がないからこういう風にされると困る。

「フ란ツ」

わたわたしていると白夜が低い声で名を呼んだ。

「今回のように、辛いことはこれからたくさんある。お前はそれと、ずっと戦っていかねければならないだろう。だが、それでも、お前が王としてたたなければ、世界は何も変わらない。もう一度訊く。お前は――王になる気が、あるか」

「――」

逃げられなかった。ここで、覚悟を決めなければならなかった。

「――ある」

フ란ツは、言った。言つて、顔を上げた。

「俺が王になって、世界がよくなるんだったら・・・少しでも、悲しいことがなくなるんだったら・・・なるよ、俺は。王になる」フ란ツは、ふっと笑って慎倫を見た。

「――俺、さ。まだ何にも知らないし、世界のことなんか全然わかんないけど・・・すげー頼りないと思うけど、それでも、頑張るからさ。これから、よろしくな」

フ란ツは、慎倫に右手を差し出した。

「フ란ツさん・・・」

「フ란ツ、でいいよ。呼び捨てで」

「・・・はい」

慎倫も微かに破顔して、右手を握った。

「ーそういえば、受験票ってどうなったんだ？」

フ란ツが思い出したようにぽつんと言うと、慎倫が「あっ」と声を上げた。

「・・・オーギュが持ってたんだろうな」

白夜が顔を顰めて言った。

「何で？」

「・・・ただの嫌がらせだろう」

白夜は心底忌々しそうな顔をした。

（ホントにオーギュのこと嫌いなんだなー・・・まあ、敵なんだろうし・・・）

オーギュは、今回のことに加担していないと言っていた。だったら、もう一人のーラウルスという男が、圭凌に付け込んだのだろうか。

（・・・俺を、王にしない為に、か・・・）

俺が王になれば、今回みたいなことがずっと続く。でも、なかったら、少しでも防げるんだっただらう。

（・・・ならなきゃ、王に。俺がー・・・）

「道晋、受験票を再発行してやってくれないか」

白夜が道晋に言うのと、慎倫はびっくりしていた。

「あの、でも・・・そんなご迷惑は」

「別に構いませんが・・・ただし、印は本人が行って押してもらわなければなりません」

「学長様・・・」

慎倫は学長を見た。

「裏山に住む仙人のところへか・・・俺も丁度用があつた。俺達と一緒に行く」

白夜はフランツを見た。

「いいな、フランツ」

「ああ。慎倫も、それでいいか？山登りキツいかもしないけど・・・」

「はい。僕のことですから・・・ありがとうございます・・・」

慎倫は顔を歪ませていた。と、ぼん、と頭に手が載せられた。

「泣いていいんだぞ」

フランツが、手を載せたまま言った。

「お前、絶対辛いはずだろ、今。泣いていいんだぞ。めいっばい泣いて、それで、明日山に行こう。試験受かって、兄ちゃん喜ばしてやろうな」

よしよし、と頭を撫でていると、慎倫の瞳がだんだん潤んできた。

「・・・っ、う・・・っ」

細かく震えだした肩を見て、フランツは慎倫を抱き寄せてやった。

「兄、様・・・兄様・・・っ！」

「うん・・・」

「兄、様あ・・・っ」

兄弟のように慎倫をあやしているフランツを見て、白夜は微笑した。道晋もそれは同じで、二人は静かに部屋を後にした。

夜風が吹いていた。フランツは、泣き疲れて眠っている慎倫の傍で眠っている。

「―随分と、酷いことをなさいましたね」

白夜は、入国した時に訪れた社に来ていた。

「―来たか・・・」

声と共に、すぐ傍に少年が降り立った。薄い水色の髪に、青みがかった水色の瞳。着ている物もやはり寒色で、どこことなく冷たい感じのする。寒空だった。

「慎倫の兄が亡くなりました」

「—そうか」

寒空は僅かに目を伏せた。

「何故、弟を選んだのですか・・・兄を選んでいれば、こんなことには・・・」

「白夜」

それ以上言つのを許さないと言っても言つように、寒空は白夜の言を遮った。

「我が慎倫を選んだのは、天つ才故ではない。その魂だ」

「魂・・・」

「もし慎倫が兄と同じ立場に立っていたとしても、慎倫ならば同じ結果にはならなかったであろうよ」

寒空は夜空を見上げた。

「その者の、心根次第だということだ・・・」

寒空は、視線を白夜に戻した。

「我等は全能ではない。護れるのは一人だけ・・・他の者の望みを叶えてやることまで、手が廻らない」

「・・・」

「その者を王が見つけ出し、全員揃えて、天帝の加護を受ける・・・そうすることによって、闇の者達を隔てる結果が生まれる・・・闇の者達は、この世界に迂闊に手出し出来なくなる・・・ごく稀に、干渉されることもあるがな・・・」

あまりに強く闇の感情を持っている者ならば、魔帝達も接触することが出来る。だが、それ以外は。排除することが出来る。

「白夜、我等は平等ではない。護れる者と護れぬ者が居る。それは全て、この世界の為。お前も、それは解っているだろう」

「・・・はい」

「あまり人に肩入れするのは止める。どんなに願ったところで、共に生きることなど出来ない」

「・・・わかって、おります・・・」

人は短命だ。瞬きするほどの間しか、共に居ることは出来ない。解っているのに。解っていたのに。

「・・・お前は、弱くなったな」

「・・・え・・・」

「前王に逢ってから、お前は弱くなったよ」

「・・・」

寒空は、遠くを見ていた。

「・・・だが、それでいいのかもしれない。お前は、その任につくには優しすぎるのだ。我等祭神よりも、人と深く関わって居らねばならんしな・・・」

「・・・」

「だが、白夜よ。そうは言ってもお前は救世主だ。それをゆめ忘れるな」

「はい・・・」

「ともあれ、我の加護した者を見つけ出せたのだから、一先ずは合格だ。先へ進むがよい」

「ありがとうございます」

白夜が頭を下げると、寒空はフツと消えていた。

「・・・弱くなった、か・・・」

一人残された白夜は、呟いて、微笑った。

今にも泣き出しそうな、そんな笑みだった。

王様と仲間達 水色編？

「ーねえ、それ、アンタがわざわざ創んでも、アタシがやってあげるわよ？」

カーン、カーン、と音を立てて、宝石を削っている現王に、彫金師は言った。

「んー、駄目だ。これは白夜に贈る物だから」

「は？どついう意味？」

振り返った彼は、こちらが毒気を抜かれるぐらいの笑顔で、さわやかに言ったのだ。

「ーときにフランツ。お前、剣は使えるか」

翌日になって、山歩きをしている時に、白夜は言った。

「うん、まあ・・・親父にしごかれたから、それなりには・・・」

フランツは自分の幼少時代を思い出していた。

朝起きて剣の稽古、果樹園の手伝い、昼食べて稽古、稽古・・・夕飯。そんな感じだった。

「・・・そうか」

白夜はそれだけ聞くと、後は何も言わなかった。

それから半日ほど歩いて、ようやく仙人様と呼ばれる人のところに辿り付いた。

「ーここが、そうなのか？」

「はい」

フランツが問うと、慎倫は短く答えて前に進んだ。

三人の目の前に立っているのは、小さな小屋だった。古そうではあるが、どこかしら傷んでいるというわけでもない。

慎倫が扉をノックすると、中から返事があった。

「誰かしら？」

まだ若い、女の声だった。

「涼秋大学から参りました、慎倫と申します。受験票を再発行して頂きたく、印を頂きに参りました」

「再発行・・・？」

女は怪訝そうな声を出した。

「受験票は、基本的に再発行しないことになっているけれど？何か止むを得ない事情があったのかしら？」

「はい・・・」

慎倫はぐつと唇を噛んだ。受験票を紛失した経緯を他人に話すには、傷が深すぎた。

何も言えずに黙っていると、白夜が慎倫の横に立った。

「闇の者に持っていていかれたんだ。ここを開けてくれないか、凜」

「！！」

中から驚きの声が上がった。

「凜……？」

「中に居る仙人の名だ」

ガチャ

ドアが開くと、そこには女の人が立っていた。

二十代ぐらいだと思われるその女性は、勝気な瞳でこちらを見ている。金色の、柔らかくウェーブのかかった髪を高い所で括っている。

「……あら、まさか今頃アンタに会うとは思わなかったわ」

「……そうだな。本当に久しぶりだ」

「あの、……お二人は、お知り合いなんですか？」

すぐ傍に居た慎倫が話し掛けると、二人は同時に視線を向けた。

「昔の仲間だ」

「そうね、一言で表すんなら、そんな感じね」

フランツはそれを傍観していたのだが、不意に凜と呼ばれた女性と目が合った。

「……シュトラウス？」

凜は瞠目した。

「……違う、……フランツだ」

白夜が硬い声で言った。後姿から、表情は窺えない。

「……ああ。次の王ね」

凜は得心がいったように頷いた。

「まあいいわ。私は凜。巷では仙人とか言われてるわ。とりあえず中に入りなさい。歓迎するわよ。その子の印も押してあげる」

凜はそう言くと、長い髪を翻して中へ入って行った。その後に白夜、フランツ、慎倫と続く。

「コレでよし、と」

夕飯を（半ば強引に）ご馳走になった後、凜は早速慎倫の受験票に

判を押した。

「三人とも、今日は泊まってくといいわ。今から山下りると日が暮れて危ないから」

「え、でも・・・」

「いいから泊まっていきなさいって。ここ、滅多に客人来ないのよ」
ヒマだからアンタ達の話聞かせて頂戴、と言われて、結局泊まることになった。

「ーで、フランツだけ？が次の王になるのね。慎倫くんは最初の仲間ってトコね。どう？当たりでしょ」

「はい・・・その通りですが」

何となく敬語を使いつつ、何で解るんだろうと思うフランツだった。

「何で解るのかって？アタシもね、昔王に仕えていたから」

「えっ?!」

「前王にですか？」

フランツと慎倫が同時に思ったことは、「じゃあこの人500年以上生きてるのか？」だった。

「・・・凜は仙人だからな。並の人間より大分長寿だ」

大分で済まされる程度のことじゃないと思う。

「まあね、結構長生きしてるわ。でも、女性に歳訊くのは失礼よ？」

「はあ・・・」

フランツは何も言えなくなった。

「でも・・・何か思い出すわね・・・昔のこと・・・」

うつとりと目を細めた凜は、とても美人だった。

「あー・・・久々に飲みたくなったわ。白夜、付き合いなさい」

「・・・フランツ、慎倫と一緒に先に寝てろ」

白夜はどこか諦め口調で言った。

フランツはただ頷くしかなくて、そのまま宛がわれた部屋に向かった。

「……………」

「フランツ、どうしたんですか？」

ベッドの上でごろごろしていると、慎倫が訊ねてきた。

「……うん、いや……何っーかさ……前の王様ってどんな人だったんだろうなあーって……」

いきなり生まれ変わりだとか次の王だとか言われて旅に出たけれど、思えば自分は「王」というものがどういふものなんだかさっぱり解らないのだ。

「……立派な方だったと聞いています」

「慎倫、前の王様のことが知ってんのか？」

「伝記に残っているのを知っているだけです。……知りたいのならば、お師匠様に訊くのが良いのでは？」

「ーうん、そうなんだけどさー……」

白夜に訊くのは、駄目だ。何かそんな気がする。白夜は前の王様の話を全くしないし、時々話題に出るときには、ちよっただけ痛そうな顔をするから。

「……訊きづらいなんだよな……」

きつと、白夜にとって前の王様はすごく大事な人で。それを喪って、ひどく傷付いたに違いない。

『お前が王にしてくれって言ったから待っててやったのに、五百年も待ってやっと会えたら、覚えてないなんてさー』

（……俺、すげー酷いのかなあ……）

きつと、ずっと待ってたんだ。

俺は、過去のことなんて覚えてないし、思い出すことも出来ないしと解ってる。だけど、俺が知らないということは、白夜にとって辛いことであるのは違いないと思う。

だけど……

（俺の、魂の核のもう半分は、どうなったんだろうー）

もしかしたら、もう半分は、昔のことを覚えているのではないだろうか。

（何か、そんな気がする・・・）

もしそうだったら、どうなるのだろう。

「やれることを、やるしかないですよ」

慎倫が言った。小さく笑っていた。

「僕たちは僕たちで、やれることをやるしかないです」

「・・・そうだな」

歩き出したんだから、もう止まらない。

何が起きたって進むしかないのだから、考えても仕方ない。

「・・・寝ようか」

「はい」

いい夢が、見られるといいよな。希望がある、未来の夢が。

「ーで、アンタは何しに来たわけ」

程よく酒が入った頃、凜が言った。

「二つほど、創って貰いたいものがある」

白夜は応えて言った。

「へえ、何？」

凜はちよつと酔っていた。頬が赤く染まっている。

「剣と・・・腕輪、だ」

「腕輪？・・・ああ、シュトラウスの指輪みたいな？」

「そうだ。頼めるか」

「・・・別にいいけどおー・・・」

凜は白夜に詰め寄って言った。

「何で、腕輪なわけ？シュトラウスと同じに、指輪じゃ駄目なわけ？」

「フ란ツは剣が使えるそうだ。剣を持つのに、指輪だと邪魔だろう」

「シュトラウスだって剣握ってたじゃない」

「・・・あいつの専門は素手だ。剣が主力じゃない」

「シュトラウス、指輪は胸から下げてたじゃない」

「・・・あれはあいつが勝手にやったんだ・・・」

「ふーん・・・」

凜はにやにやしている。白夜が眉根を寄せる。

「・・・何だ」

「別にいい？ちよっと思いい出してさ」

「何を」

「『お前から貰った物だから、心臓の近くに置いておきたいんだ』
って言ったシュトラウスの顔」

「・・・っ」

白夜は目を瞠った。

「愛されてるわよね・・・」

「昔の話だ・・・」

「の、わりには、まだピラスしてるじゃない」

「・・・他につけるものがないからだ」

「素直じゃないわねえ・・・知ってた？そのピラス、シュトラウス
が創ったのよ」

「！お前が創ったんじゃないのか・・・」

「最終的な仕上げはアタシがやったけどね。形とか色とか選んだの
も、彫ったのもシュトラウスよ」

「な、んで・・・」

「聞きたい？」

「いや、聞きたくない」

「『お前が彫ったら俺はきつとお前に嫉妬するから』だってさ」

「・・・聞きたくないと言った・・・」

白夜は額を押さえて頂垂れた。

「アンタもさあ、あんだけ露骨に愛情振りまかれてたのに、よく拒
みきったわねー。仲間内じゃ全員がいつ折れるかって賭けてたんだ
けど、結局折れなかったし」

「そんなことしてたのか・・・」

白夜は呆れた顔をした。

「だって、幸せになって欲しかったんだもの。アンタにも、シュトラウスにも。絶対お似合いだったのに」

「・・・ほんの、短い間だ。俺たちにとっては、瞬きにも等しい・・・どうせすぐに居なくなってしまうのだから、最初から・・・」

「・・・ま、気持ちは解らないでもないけどね・・・受け入れたら、後が辛い。アンタの気持ちも解るけど・・・」

でも、と凜は杯を傾けた。そしてチツと盛大に舌打ちした。

「じれったくしてしょうがなかったわよ。一時期無理矢理にでもくっつけてやるうかって仲間内で相談したけど、否定派に4：3で負けたからお流れになったわ」

「お前ら・・・」

「相真の『二人の問題だから、他人が口出しするのはよくない』っていうのに、結局押し切られた感じよね・・・」

「・・・あいつらしいな・・・」

僅かな救いを見つけたように白夜は笑った。

「でも、アタシは諦めてないわよ」

「・・・何を」

「アンタが幸せになるよう、祈ること。救世主だからって幸せになっちゃいけない決まりなんかない筈だわ。だから、折れて欲しかったのに・・・」

「凜・・・」

「・・・今だから言うけどね、アタシだってシュトラウスが好きだったのよ。滅茶苦茶愛してたわ。むしろあいつが王だったから付いて行ったようなもんよ。なのにあいつときたら・・・！」

凜は杯を握り締めた。今にも割りそうな勢いで力を込める。

「『心に決めた人が居るから』とかカツコつけてー！！報われないのなんか一目瞭然だったわよおお！！しかも白夜！アンタ、始めの頃全く気付いてなかったでしょう！！」

ズビシ、と指を突きつけられて、白夜は思わず頷いた。

「そーでしょうねー、アタシはともかく、相真でさえ気付いてたのに、アンタときたら・・・どんだけ鈍けりゃ気が済むのよ・・・！」

「・・・気付いてたのか・・・」

「当たり前でしょ！！アンタねえ、信じられないわよもう！鈍い！鈍すぎるの！！」

一方的に怒鳴りつけて息を切らしている凜を、白夜はどうしたもんかと思つめていた。

「・・・でも、まあ、東が来た辺りで気付いたみたいだったけど・・・大方、あの美しいものは何でも愛でる男にシユトラウスが嫉妬して、何かしら事を起こしたんだろうとは思ってたけど」

「・・・何でそんなことが解るんだ」

白夜が神妙な顔で言うのと、凜はがっくりと肩を落とした。

「誰だつてわかるわよ・・・一緒に旅してたのよ？見てりゃわかるつての・・・」

げんなりと凜は言った。ふう、と溜め息を一つ吐いて、凜は顔を上げた。

「ーいいわ、腕輪だろうが剣だろうが創つてやるわよ。ただし、一つ約束なさい」

「約束・・・？」

「今度幸せになれそうなチャンスを見つけたら、素直になりなさい。これが条件よ」

「・・・俺は、」

「守れないんなら創らないわ」

「・・・解った。善処しよう」

「承諾なさい」

「・・・承諾する」

「いいわ。創つてあげる。ただ、剣はやっぱり神薙を使ったほうがいいと思うわよ？あれ以上の剣は、アタシには打てないわ」

「ああ、そのつもりだ。所在も掴みである。ただ、それまでに剣に

慣れておく必要がある」

「―成る程。練習用ってわけね。それをアタシに打たせようだなんで、アンタ、ほんつとに変わってないのね――」

凜はそう言つと、懐かしいような、ほんの少し寂しいような、そんな笑みを浮べた。

王様と仲間達 水色編？

真つ暗な場所に、靄が立ち込めていた。

白い靄の中を歩いていけると、前方に人影が見えた。

（誰だろう・・・？）

ゆっくりと近付いていくと、その姿が鮮明に見えた。

真つ直ぐに伸びた黒髪が、耳の横で綺麗に切りそろえられていて、翡翠色の瞳が、大きく揺れていた。

少し気の弱そうな感じのする、けれど凜とした、美しい少女だった。

（・・・君は―・・・？）

誰、と唇が動いた瞬間、少女が微笑んだ気がした。

そこで、目が覚めた。

【王様と仲間達 t i t l e : 水色編？】

「おい、起きろ」

フランツが目覚めると、仏頂面のシヴァが立っていた。

「・・・シヴァ・・・？」

フランツが寝ぼけてその名を呼ぶと露骨に嫌そうな顔をしたが、特に何も言っていない。呼び捨てにされるのはムカつくが、訂正するのも面倒だということらしい。

「ガキはもう起きて飯食ってるぞ。さっさと起きろ」

「あー・・・うん、えーと・・・」

ガキ「慎倫、という構図が成り立つまでに軽く三秒。それから腑に落ちないことを頭でまとめるのに二秒弱。」

「何だ」

「えと・・・白夜は？」

名前の初め三文字ぐらいを言ったぐらいでシヴァの顔に青筋が立った。ピキツ、と音がしそうなぐらい、解りやすい立ち方だった。

「・・・用事がある。今日はお前らと行動できない。だから俺がお前らの護衛につく」

「・・・用事・・・？」

「後で本人に聞け」

ぶっきらぼうにそれだけ言つと、さっさとドアの向こうに消えてしまった。

「・・・何で機嫌悪いんだろう・・・」

フランツは、シヴァという存在がよく解っていない。だが、自分は何だか好かれてないようだということは感じていた。何故？

（会ったばかりなのになー・・・）

フランツは一人ごちで、うーん、と背伸びをした。

「おはよう慎倫。いい天気でもあったな」

「おはようございます。ええ、今日は山を下りますからね・・・この分だと、下りるまで晴れていてくれそうですね」

慎倫は窓の外を一瞥してから、フランツに向き直った。

「僕、今日の夕方に試験なんです。結果が出るのが明後日なので、明日は街に出てみませんか？色々あつて、結局この国のこと説明できてませんでしたから・・・」

「あー、うん。それいいな。そうしよう」

フランツは二つ返事で頷いた。

「今日試験なのか・・・頑張れよ」

「はい！」

ほのぼのという空気が流れていた。

「それにしても、お師匠様達はどこに行ったのでしょうか・・・」

「さあな・・・」

「凜さんにも、泊めていただいたお礼が言いたかったのですが・・・」

「残念そうに呟く慎倫は、フランツは何となく見ていた。

（用事って、何だろう・・・）

白夜はいつも何も言わない。フランツに関わることであっても、フランツが知る必要のあることしか教えてくれない。

それは、どうしてなのだろうと時々思うことがあった。

（・・・あんまり、関わろうとしてないみたいだな、そんな気がする
・・・）

白夜の目的は、フランツを王にすること。もしかしたら・・・いやきっと、フランツという存在は、それ以上でもそれ以下でもないのだろう。

ただ、王にする為に、傍に居る。そんな感じがする。

それが、フランツは嫌だった。

（・・・折角会えたんだから、友達になりたいのにな・・・）
すぐ近くに居るのに、お互い考えてることが解らないなんて寂しい。小さなことでも、分かち合えたら、仲良くなれたらいいのと思う

のに。

「・・・フ란ツ？」

気がつくと、慎倫がフ란ツを覗き込んでいた。

「？何だ」

「何か神妙な顔してましたよ。何か悩みでもあるんですか？」

きよとした顔で慎倫が訊いてきた。

「いや、別に・・・」

「本当に？」

「ああ、本当」

「なら、いんですけど・・・何か悩みが出来たら、言って下さいね。僕じゃ、何の力にもなれないかもしれないけれど、お話を聞くぐらいなら、出来ますから」

そう言つて慎倫はニコつと笑つた。こういう顔を見ると、この子はまだまだ子どもなんだと思う。

「ああ。ありがとな、慎倫」

手を伸ばして頭を撫でると、くすぐつたそつに目が細められた。

夕方。

慎倫の受験中、フ란ツは控え室近くの廊下で待っていた。

備え付けられている長いすに座りつつ、ぼうつとしていると、どこからかシヴァが現れた。

「・・・」

「何か用か」

フ란ツがじつと見つめると、シヴァが顔を顰めて訊いてきた。

「・・・訊いてもいいかな」

「何を」

「前王のこと」

「断る」

スパツと切り捨てられて、フ란ツは二の句が告げなくなった。

「何で？」

「あー！うっせえな。俺はあいつが嫌いなんだよ！」

「何で？」

「何でつて……ム力つくから」

「何で？」

「あのなあ……色々とあつたんだよ、あいつとは」

シヴァは腕を組んで向かいの壁に寄りかかった。丁度、フ란ツと向き合う形になる。

「色々……か」

「色々だ」

「……」

「……」

暫らく沈黙があつた。

「……お前」

「ん？」

ぽつんとシヴァが言った。

「あいつと、全然似てねえのな」

「え……」

いい意味か悪い意味かに関わらず、呟かれた言葉は衝撃的だった。

「見た目も似てねえし、性格はまだよく解んねえけど、何か違う気がする……白夜や凜が似てるって思ったのは、魂のもっと奥の方のことだろうから、俺には正直解んねえ」

「……生まれ変わり、なの？」

「俺も生まれ変わりって奴には会ったことがあるがな。似てることの方が多いんだが……お前は似てねえな。少なくとも俺は、似てないと思うぜ」

「……似てない……」

それは、どうとっただろうか。前の王ほどの器がないとっただろうか。現段階で既に見放されたということだろう

か？

「お前の方が全然マトモだ」

「・・・・・・・・・・は？」

アレ？

「まあ確かに雰囲気はちったあ似てるかもしれないが。お前の方が断然謙虚だし、第一我が儘じゃない。俺はお前も別に好きじゃねえが、あいつと比べたら断然マトモだ」

「・・・・・・・・はい？」

さり気なく嫌いだと言われた。これはショックを受けるべきなのか喜ぶべきなのか。

「・・・・・・・・先に言っておく。俺はお前たちが嫌いだ」

「・・・・・・・・理由を訊いても？」

おずおずと訊ねると、シヴァは顔を顰めた。暫らくして、諦めたように溜め息を吐いた。

「お前たちは、白夜を苦しめるからだ」

「・・・・・・・・・・」

「特にあいつは・・・・ああ、思い出ただけでムカついてきた・・・・止めよう。お前はな、まあ仕方ないと言えば仕方ないが。生まれ変わりのくせに全然記憶がなかったからな。お前のせいじゃないが、それでもやっぱり嫌いだ」

「・・・・・・・・・・」

理不尽だ・・・・！と思ったが黙って聞くことにする。

「それに・・・・お前たちは、関わりうとするだろう、一人の人間として。救世主としてじゃなくて、白夜、という存在に。それが、あいつにとってどんだけしんどいことだか、解るか・・・・」

シヴァは遠くを見ていた。空さえも越えて、遙か彼方の夜を見ていた。

「俺たちは、お前たち人間にとって、考えられないくらい永い時を生きる。それは、永遠にも等しい・・・・その中で、出会っては別れるのを繰り返している。・・・・解るか。深く関われば関わるだけ、

別れるのが辛いんだ。そしてそれは、絶対に訪れる別れだ。お前たちは、俺たちにとつては、ほんの少しの時を共有できるに過ぎない存在だ。だから、一々深く関わってたら、それだけ辛い思いをすることになる。だから、俺たちは人間と深く関わらないようにしてるんだ。それを――」

いとも簡単に、ブチ壊したあの男。

「シュトラウスに出会わなければ・・・きっと泣くこともなかったんだろうよ。白夜も俺も・・・自分に心があるなんてことに、気付こうとしなかったし、ずっと見ないフリをしてきた。それを・・・無理矢理に呼び起こしたんだ。それまで眠らせていた感情を」

悲しい、辛い、苦しい。それは、この使命を負った自分達には、絶対に付き纏う感情だった。それを全部背負っていたら、心が碎けてしまう。だから、封じた。初めからなかったものとして。なのに。

『お前にだつてさ、ちゃんと心があるんだから。泣きたい時には泣いていいんだよ』

一度自覚してしまえば、もう、封じることが出来なかった。

「・・・だけど・・・あいつと出会わなければ、きつと、笑うこともなかった・・・だから、あいつを責めることは出来ない」

「・・・」

「だけど、白夜が苦しんでるのを見るのは嫌なんだよ。あいつなんか何なんだよ、王になって一月ちよくらいでさっさと死にやがって・・・！だから人間と関わるのは嫌なんだ！どうしたって俺たちを置いていくんだ・・・！」

「・・・シヴァも、シュトラウスが好きだったんだな」

フランクが感慨深げに言うと、シヴァはズリ、と壁から滑った。

「気持ち悪いこと言ってるじゃねえよ！！てめえ、即位する前にあの世に送ってやろうか」

「いや、遠慮しときます・・・スミマセン。ただ、嫌いな人が死んでも、そこまで怒らないかなーって・・・」

「嫌いに決まってるだろーが！白夜を泣かす奴は皆嫌いだ！」

「・・・大事なんだな」

フツと、フランツは菩薩のような笑みを浮べた。シヴァは居心地悪そうに視線を泳がせた。

「大事、つつーか・・・生まれた時から一緒にいるからな・・・兄弟みたいなもんだ」

「兄弟・・・」

「・・・本当の、兄弟じゃねえけどな・・・」

そう言った時、一瞬だけシヴァの瞳に翳が差した。フランツが何か言いかけた時、終了の鐘が鳴った。

「終わったか・・・」

シヴァは呟いて、フツと消えてしまった。

取り残されたフランツは、今聞いた話について考えていた。

『だから人間と関わるのは嫌なんだ！どうしたって俺たちを置いていくんだ・・・！』

・・・心を封じていた方が良かったのかどうかなんて解らない。深く関わらないほうがいいのかどうか何て、俺には解らない。

だけど、一つだけ言えることがある。

「・・・きつと、俺でも、シュトラウスと同じことをする・・・」

短い間でもいい。

折角出逢えたのだから、親しくなりたい。

ずっと一緒に居られなくても、せめて。共に生きている間だけでも。

そう願って止まないのは、短い時を生きる者だからなのだろうか。

「・・・・・・」

いつも辛そうなのに、少しでも微笑みが灯ったら、と。

王様と仲間達 水色編？

「よ、ラウ兄。様子とお？」

「何も変わらん。眠ったままだ」

「ふーん……」

オーギユは口の端を上げて笑った。

「何だ」

「いやー？ 白夜に、手出ししてないって言ってたからさー」

「……」

「ホントは、手出ししないんじゃない、出来ない、なのになと思
つてー……」

「……一度天帝の加護を受けた者だ……簡単には堕ちんか……」

「そうだねえ……それもあるだろうなあ……」

オーギユは笑った顔のまま、暗闇の中で光り続ける円の中を見てい
た。

その中には、一人の人間が横たわっている。

それは、クリーム色にし茶色掛かった髪の青年だった。

【王様と仲間達 t i t l e : 水色編？】

朝起きて暫らく経つと、白夜が戻ってきた。

「白夜。どこ行ってたんだ？」

そう訊くと、白夜は持っていた包みを机の上に置いて、巻いてあった布を外した。

「これを創っていた」

布が外されると、中に入っている物が何だか解った。

銀色の剣と、金色の腕輪……

白夜は、腕輪を取ってフ란ツに差し出した。

「これは、お前の身を守る物だ。何かの理由で俺が傍に居ない時でも、これがお前を守る。嵌めている」

受け取った腕輪は、不思議な物だった。金属で出来ているはずなのにちつとも重くなくて、腕に嵌めると空気のように、その存在が自然に馴染んだ。

「……ありがとう、白夜」

白夜はちよつとだけ驚いたような顔をして、それから「当然だ」と言った。

お前は王だから。そう続きそうで、フ란ツは苦笑いを噛み殺した。

「この剣は？」

「持っている。護身用だ。どれ程の腕かは知らないが、剣が使えるんなら持つてないよりはマシだろう。……王に相応しい剣が手に入るまでの練習用だ」

「練習用……？」

「この剣は凜が打った物だが……あいつが打った中で、最高と謳われる剣がこの世界にはある。それは、王にしか使えない剣だ。お

前はそれを使うことになる。・・・だが、今手元がないからな。――
先ず違うものを用意した」

「王の・・・剣・・・か。どこにあるんだ？」

「・・・昔のままであれば、次の国・・・青の国の闘技場に飾られているはずだ」

「青の国か・・・どんな所だろー」

「まずこの国のことを知れ。慎倫が案内するんだろう」

「ああ、うん。でも今葬儀中だから・・・」
ガチャ

言い終わるか否かのうちに、部屋のドアが開いて、慎倫が入ってきた。目元が紅く、泣き腫らした後があった。

「慎倫・・・」

フランツが声をかけると、慎倫はぎこちなく笑った。

「ー終わりました。街に行きましょう。ちよつと顔洗ってきますね」
パタパタと足音が遠ざかっていく。

「・・・慎倫・・・」

「大丈夫だ。慎倫は、そんなに弱くない」

フランツが振り向くと、白夜は瞼を伏せていた。

「それでも、辛い時があるだろう。一人でどうしようもなくなった
ら助けを求めてくる。そうなった時に、支えてやればいいんだ」

白夜は瞼を伏せたまま言った。

（そういうことが、言えるのに・・・）

「ー白夜もな」

ほとんど無意識に呟くと、白夜は目を開いてフランツを見た。

「辛かったら、辛い、ってちゃんと言うんだぞ。俺が居るんだから」
「――」

白夜は目を睜った。けれどすぐに俯いて、表情を見えなくしてしま
った。

更に何か言い募ろうとした時、慎倫が戻ってきて、街に行くことにな
った。

「水色の国は、主に学問が発達しています。勉学のことだけに留まらず、歴史・芸術・医学など、幅広く知識を所有しています。それは、昔から水色の国は書物の多い国で、ずっと昔の国守が、大層本が好きで、他国から本を大量に買い占めていたからだと言われています。書籍量だけで言えば、世界で一番だと言っても過言ではありません。僕が在籍している涼秋大学の他にも幾つか大学があり、国で運営しているものが4つ、個人、または施設で運営しているものが7つあります。初めて立った大学が涼秋大学だったので、一番伝統と蔵書量が多いとされています。開祖であらせられる道晋学長様は、幼少期から学問を修め、それを自らに留まらず、世に広める為に大学をお立てになったと聞いています。ちなみに特産は――」

「ちょ、ちよつと待て。タンマ！」

「つらつらと説明していた慎倫の言葉を、フランスは遮った。

「何でしょう？」

「頭がこんがらがってきた・・・とりあえず、学問の国ってことは解ったよ、うん」

「専門は学問ですが、他に刀鍛冶が多いことでも有名です。隣の青の国が、武術の国なので、刀は重要な輸出物とされています。中でも、先日お世話になった凜さんの創られる刀は当代一だと聞いています」

「へー・・・これが・・・」

「その刀、名前は何て言うんですか？」

「へ？」

「凜さんは、刀を打つたら必ず名前をつけるといって噂があるんです。その刀にも何か名前がついているのではないかと思って・・・」
フランスはチラリと斜め後ろを歩く白夜を見た。

「・・・疾風、だ」

「はやて・・・」

「格好良い名前ですね！駆け抜ける風ですか」

慎倫身を乗り出してフ란ツが腰にさしている刀を見た。

「へー・・・疾風、か。良い名前だな」

嬉しそうに刀に触れるフ란ツを見て、白夜は顔を顰めていた。

『アンタもシヴァも風の眷属なんだから、お揃いでいいでしょ』

（・・・迷惑だ・・・）

白夜は額を押さえた。何であの仙女は、毎回毎回余計なお節介をするのだろう。

（・・・）

白夜がちよつとやなことを思い出していると、左の方で言い争っているのが聞こえてきた。

「ンだよ兄ちゃん、やろうつてのかイ？」

「五対一で敵うと思つてんのか？ああ？」

ガラの悪い男達が五人、それぞれ剣やらナイフやらの得物を持って一人の青年を取り囲んでいた。後方で若い女性が走っていくのが見えたから、大方絡まれていたのを助けたら、今度は自分が絡まれたというところなのだろう。

「俺にはあんた達とやり合う理由はないが、それであんた達の気が済むのなら相手になろう」

青年はそう言つて、腰にさしていた刀に手をかけた。

「何だあ？生意気なガキだな」

「よそもののクセに・・・やっちまえ！」

一人がそう叫ぶと、男達が一斉に青年に飛び掛った。

青年は、藍色の髪に、深い紺色の瞳をしていた。基本的に国民は髪の色が全員同じなので、藍色の髪でこの国の人間ではないと判断できる。

「どりゃああ！」

「いねや！ガキイイ！」

青年は腰を落すと、そのままの状態で一氣に刀を抜いた。
一閃。

空中を刀が巡ったと思ったら、男達が吹っ飛んでいた。

「な、何だ、今の・・・」

驚くフ란ツの横で、白夜が僅かに眉根を寄せた。

「・・・今は・・・」

「な！何だこのガキは！」

「やりやがったな！！」

男達は全く懲りずに、再び青年に向かっていく。どうやら先程の一撃で怪我をしたのは、未だに呻いている男一人のようだ。

青年は向かってきた男達を一人ずつ跳ね除けて行った。最後の一人を倒した後、青年は刀を鞘に収めた。

「すつげえ・・・」

青年は何を思ったのか、倒れた男を一人ずつ引きずって道の端へお
いやった。

「・・・何やってんだ？」

思わずフ란ツが声をあげると、青年は、聞こえたらしくフ란ツ
達を見た。

「・・・道の真ん中に転がってたら邪魔だろうから、片付けている」

「へー、手伝うよ」

「要らん。これは俺が招いたことだ。他人の手は借りない」

「いいからいいから。女の子助けたんだろ？お前、いい奴だな」

フ란ツが屈託なく笑い掛けると、青年は瞠目した。それから、照
れたのを隠すように、無理矢理むずかしい顔をした。

「別にー」

二人が会話している間に、後ろで最初に倒れた男がよろめきながら
立ち上がった。

「！」

気付いたのは白夜だった。

「くたばれえ！」

男が投げたナイフが、一人抱えている状態の青年に飛んでいった。

「っ！」

避けきれない、と青年が身構えた時、横から思いっきり突き飛ばされた。

「白夜！」

突き飛ばしたのは白夜で、伸ばしたままの右腕を、僅かにナイフが掠めた。

「っ……」

「大丈夫か！？」

フ란ツが駆け寄っている間に、青年はナイフを投げた男のところへ走って昏倒させていた。

「……シヴァ」

白夜が小さく囁くと、すぐ横を風が吹き抜けていった。

「すまない、俺のせいだ……」

青年は深く頭を下げた。深い紺色の瞳が、心配そうに揺れている。

「大丈夫だ、大した怪我じゃない……何より、貴方に刺さらなくてよかった。刺さっていたら、死んでいたところだ」

「！」

「あのナイフ一つでか？」

フ란ツは地面に転がっているナイフを見やった。

「あれは、ただのナイフじゃないな。闇の者の力が加わってる……ただの人間に刺さったら、生きてはいられないな」

「……貴方は……ただの人間ではないのか？」

もつともなことを青年が聞いた。

「――ああ。貴方の師匠と、同じような存在だと言えば解ってもらえるか、青の祭神の門下生」

「え？」

「青の……？」

フ란ツと慎倫は同時に青年を見た。

「・・・その通り、俺は青の祭神様を師匠としているが・・・何故わかられた」

「剣の振るい方を見れば解る。真麻流は、青の祭神様の剣だからな」
「そうでしたか・・・」

青年は頷いた。

「しかし、本当に申し訳ない・・・俺のせいで怪我を負わせてしまつて・・・」

青年はまた頭を下げた。青年が切腹でもしそうな勢いで謝るので、フランツと慎倫はおろおろしていた。

「何か、詫びをさせて欲しい・・・俺に出来ることであつたら・・・！」

「・・・なら、一つ頼もうか」

「「え」」

同時に声をあげたのはフランツと慎倫だ。青年はバツと顔をあげた。

「俺たちは明日にでも青の国に向かおうと思つているのだが・・・青の門の前まで、護衛をしてくれないか」

白夜は狙っていたかのように淡々と言つた。

「お安い御用だ。俺も、青の国に帰るところだつたからな・・・しかし、その怪我で動いて平気なのか」

「平気だ。俺のことは気にしなくていい。貴方に守ってもらいたいのはこっちの二人だからな」

白夜はそう言つてフランツと慎倫を見た。

「俺たち・・・？」

フランツは自分と慎倫を指差して言つた。

「そつだ。何かあつた時に、俺一人では対処しきれないかもしれないからな
いからな」

「・・・わかつた。そういうことなら、承ろつ」

青年は立ち上がった。右手の上に左手を乗せた。それを胸の前辺りに持つて来て、そのまま礼をした。

「俺の名は桐生。貴殿達の護衛仕つた。よろしく頼む」

フ란ツは面喰らった。慎倫は、同じようにかしこまって返礼した。
「僕は慎倫と申します。こちらこそどうぞよろしく願います」
フ란ツは何だかやらなきやいけなみtainな雰囲気だったので、
二人に倣って手を組んだ。と、そこで慎倫はそれを制した。

「フ란ツは頭を上げてはいけません」

「え、何で」

「頭を下げてはならない身分だからだ」

「………」

桐生が怪訝な顔をしていると、白夜が視線を送った。それで何となく事情を察したらしく、桐生は礼を解いてフ란ツに手を差し出した。

「よろしく頼む、フ란ツ」

「あ、ああ。よろしくな、桐生」

二人がそんなやり取りをしている間に、白夜の横で風が吹いた。

「……どうだった」

白夜が周りに聞こえない程度で声で囁くと、腕輪についている鈴が小さく鳴った。

「……そうか。わかった」

先程のナイフに込められた闇の気配を追ってみたが、既にこの国には居ないらしい。

（……オーギュカ、それともラウルスカ……）

前者ならまだしも、後者ならば厄介なことになる……。

白夜は一人厳しい顔をした。

こちらが動いているように、あちらも着実に動いてきている。

魔帝が動く前に、仲間を集めきらなくてはならない。

（だが、その前にやる必要がある）

白夜は、桐生と親交を深めているフ란ツを見た。

（青の国に行ったら、修行だな……）

どれ程剣が使えるかは知らないが、王になるのならば、青の祭神の修行を受けなければならない。そこで、王にしか使えない剣技を会

得する。

（・・・前王の時のようにな・・・）

白夜は、フツと自嘲の笑みをした。

（何でこんなに、忘れられないのか・・・）

出逢った時から、居なくなった日のことまで。こんなに鮮明に覚えていたのは。

（呪いのせいか・・・それとも）

それとも。

その後のことは、考えずに止めた。

自分はもう、次の時代に居るのだからと。

王様と仲間達 青編？

「ああ、何と美しい刀だろう・・・」

「だが、足りない・・・」

「これは、中身の消えうせてしまった美しさだ」

「こんな蛻の殻となった剣はいらぬ・・・！」

「もっと、美しい剣を・・・！」

「もっと、美しい剣を、我が手に・・・！！」

【王様と仲間達 t i t l e : 青編？】

「ほお、その剣は凜仙殿が創られたのか。あの方は類稀なる刀匠と聞いている・・・さぞかし素晴らしい刀だろうな」

道晋に別れを告げて、一同は青の国へと向かっている。桐生は自らが剣術家なので、他人の持っている剣を見る目がそれなりにあるらしい。

「ああ、疾風っていうんだってさ。桐生も格好いい剣持ってるよな」

「これは青の祭神様から頂いた物だ。名を水月という」

「水月かぁ・・・へえー、カッコイイな」

スラツと桐生は刀を抜いた。細身で居て、華奢すぎない刀身が、太陽の光を受けて輝いている。その刀は美しく、透明な湖の水面のよう

に透き通っていた。

「疾風を見せてくれないか？」

「ああ、うん」

フ란ツが疾風を桐生に渡す。桐生は疾風を鞘から抜こうとしたが。

「抜けない・・・？」

「え？ちよつと貸してみ」

フ란ツが疾風を抜こうとすると、すんなりと抜けた。

「・・・？あれ、抜けたぞ」

「どういうことだ」

「それは、王にしか抜けない剣だ」

白夜が平然と言った。

「王・・・？」

桐生が驚いたようにフ란ツを見た。

「へー・・・すごい剣だな」

「お前・・・王だったのか」

桐生はフ란ツをまじまじと見ている。

「うん・・・何かそうみたい。あんまり実感ないんだけどさ」

はは、とフ란ツは笑った。桐生はそうか、とひとつ頷いた。

王と聞いても大して驚かないのは、自らが祭神を師匠としているせいであろうか。

「そういえば、この辺りに盗賊が出ると聞いている。業物はしまっておいたほうがいいかもしれない」

桐生は思い出したように言って、疾風を見た。

「何でだ？」

フ란ツが問う。

「その盗賊、何やら妙な奴等らしくてな。狙う物は金品ではなく、刀などの武器だそうだ」

「おう、よく知ってんじゃない」

「っっ!!」

フ란ツ、桐生、慎倫は一斉に声のしたほうを見た。声を発した人物は木の上に居て、視線を受けるとともに地面に降り立った。

黄色の髪に、紺色のバンダナを巻き、額にゴーグルを嵌めている。

「お前・・・ネイシンか?!」

桐生が叫んだ。

「アレ?あれー桐生じゃん、久しぶりだなあ。どうやら元気みたいだな」

「知り合いか」

白夜が問うと、桐生は苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。

「幼馴染みだ・・・。ネイシン、まさかお前が・・・」

「ああ、俺らがこの辺りで業物を狙ってるっていう盗賊だよ」

「俺ら?」

慎倫が首を傾げると同時に、ネイシンの両脇に一人ずつ男が降り立った。

「そう。俺ら盗賊屋・swallowsだ。頼まれればどんな盗みでもやるぜ」

「何でお前がそんなことを・・・!」

桐生はネイシンに向かって言った。

「・・・桐生。お前にはわかんねえだろうさ。でもな、こういう生き方しか出来ない奴も居るってことだよ」

「何・・・!」

「さーて、旅人さん達よ。ここを通るんなら、俺たちとちょっとしたゲームをして貰わなきゃならねえ」

「ゲーム?」

フ란ツが訊くと、ネイシンはにいつと笑った。

「ルールは簡単。俺たち三人と、一人ずつ戦って勝てばいい。勝て

ばそのままを道を通れて終いだ」

「負けたら？」

「負けた奴は、持つてる武器を置いてってもらう。勝った奴は置いてかなくていいぜ。もしゲームを受けないのであれば、全部置いてもらうけどな」

「・・・どうする」

フランツが桐生に言った。

「受けられるわけないだろう！こんなばかげたこと―」

「いいだろう。受けてやる」

「！」

「おい、白夜・・・！」

フランツが制しようとする、白夜は横目でフランツを見た。

「相手は三人。こっちは四人・・・相手の力量が解らないし、こちらの力量も把握出来てない・・・逃げるのは難しい。何より、三戦しろということは、こちらで二回勝てばいいんだろう。その方が確実だ」

「な・・・」

「ひゅー」威勢のいい嬢ちゃんだな。で、そっちは誰が出てくるんだ？」

「嬢ちゃんって・・・」

フランツは真横の空気が急速に冷えるのを感じた。でも怖くて振り向けない。

「俺が出る」

「桐生・・・」

「俺はもともお前たちの護衛に来たんだ。俺が出るのが筋だろう」
「フランツ、お前も行ってこい」

白夜に言われてフランツはぎょつとした。

「え？俺？」

「剣が使えるんだろう。お手並み拝見といこうか」

「えー・・・まあ、いいけどさー・・・」

面倒くさいなあ、と思いつつフ란ツも前に出た。

「これで二人か。もう一人はどうするんだ？嬢ちゃんはお出でこないのか？」

先程白夜を嬢ちゃんと呼んだ左側の男が手招きをした。

フ란ツは怖くて振り向けなかったが、背後の空気は先程より冷たくなった。

「・・・死んでも後悔するなよ・・・」

恐ろしい言葉を吐いて白夜が進み出た。

「最初は誰が行く？」

ネイシンが両隣に声を掛けると、左側の男が足を踏み出した。

「俺が行くぜ。オラ、嬢ちゃん、掛かってこいよ」

男は完全に挑発していた。桐生は控えめに白夜に声を掛ける。

「まだ怪我治ってないだろう、無茶するな」

「片腕で足りる。心配はいらない」

白夜はこれから制裁する男をひたと見据えたまま言った。

「へえ、言うねえ。その言葉、後悔させてやるぜ！」

掛かってこいと言ったにも関わらず男の方から掛かってきた。

白夜は実にゆつくりとした動作で懷から扇を取り出す。

「ハッ！そんなもんで何が出来ーぐえっ！」

実に、流れるような動きだった。自分に向かってきた男の喉笛を、

思いっきり扇子の柄で突いて男を吹っ飛ばしていた。

一同、思わず自分の喉元を押さえた。

「ぐえっ、げほっ、げほっ・・・おええ・・・っ」

むせ返る男に向かって、白夜は扇を突きつけた。

「―殺す価値もないから今回は生かしておいてやるが・・・」

白夜は扇を開き、自らの口元に当てた。

「俺に喧嘩を売って、生きていられると思うなよ・・・？」

フ란ツは、割と横の方に立っていたので、扇の隙間から白夜の表情がうかがえた。

それは、まさしく。

絶対零度の微笑み、というヤツだった。

青の国に向かう途中。

対盗賊屋 s w a l l o w s

白夜の容赦ない一撃により、まずは一勝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6935k/>

王様シリーズ2

2010年10月21日23時51分発行